

私はこうして

本を書いてきた

執筆論

谷沢永一

稀代の著述家、
七十年の軌跡

二百冊を超える著作活動を生み出してきた
企画の視点と書く技術

東洋経済新報社 定価(本体1600円+税)

去した愛書家にして博学無類の彼が、今は『坂本賢三蔵書目録』（平成九年・天理図書館）に見られる、八二〇〇点の研究上に有効な蔵書を蒐めるのに、どれほどの才覚を要したか想像を絶する。惜しみても余りある絶世の偉才であった。

幸い阪南町の小野先生宅へは我が家から徒歩五分足らず、何時の間にか出入してお子さんたちと親しくなり、『獄門島』はじめ探偵小説の筋書を話して喜ばれ、時に麻雀ではいつも鴨にされるようになっていた。そのころ小野先生は大阪毎日新聞の夕刊に無署名で、月刊雑誌十何種の寸評を四〇〇字で書く仕事もされていたのだが、新聞を熱心に読む習慣のない私は何も知らない。そこへ突然に先生から声をかけられ、『中央公論』『世界』はじめ堅い総合雑誌は今までどおり自分が受け持つから、『オール讀物』『小説新潮』その他の柔かい一〇誌ほどは今度から君が書いてくれんかとのお話であった。喜んでお引き受けしたのは言うまでもない。昭和二七年の八月から二九年の六月まで、その間、私は全力を挙げこの仕事を続けた。二三歳の私にこのような舞台を与えて下さった小野先生には感謝の意を尽くせぬ思いである。私には読書生活を始めた当初から純文学を偏重する気分がなく、謂わゆる大衆小説を賤めないでむしろ愛好していたし、戦後に中間小説と呼ばれるようになった分野をも愛読してきたから、扱う材料に多少とも土地勘があり気怯れせずに取り掛かった。

しかし、当初はかなりの頁数に達していた中間小説雑誌を毎号通読し、一冊二〇本近いそ

階に分ける気分で話題を連ねて見せなければコラムにならない。コラムはパスカルの『パンセ』みたいに、我れ斯くの如くに思う、という書き流しの一本調子では充実感が醸しだされにくいであろう。いきなり本題に入る落語はまずない。最初にマクラをフルのが噺家の常道である。けれどもその前に短かい道行きみたいに微妙な間が大切であった。高座の向かつて右から現われて着座するまでの数歩で、彼は今日の客層を見定めねばならない。座って右手の碗で茶を一口、それから小話を二つ三つ、その反応を確かめてから本題の語り方を頭のなかで調整してゆく。録音では決して味わえない生きた芸がここから生まれる。ちなみに名優と謳われた六代目菊五郎は、目前の客席は団体の招待で芸を解しないと見てとるや、途端に芝居を投げてかかるものだから、劇評家は音羽屋が御機嫌の日を選び、時代物も世話物も新作にさえ何でもござれ、兼ネル役者、の評判を得た名人の芸を評定しなければならなかったという。

舞台芸に生きる役者や噺家は、客の受けを確かめながら所作できるけれど、われわれ活字芸人には読者の顔が何時も見えない。「十六夜清心」における百本杭の場みたいに、暗闇の中のだんまり（暗闇また暗挑）を演じるのが執筆である。今で謂う物書きなるものの宿命である。いつも宙空に見えぬ読者の表情を呼び起こし思い浮かべていなければならぬ。

山口瞳は、週刊誌の連載コラムを書き続ける心得を、七回のうち二回は打球を飛ばすのが

精一杯であると語った。なるほど然りであるだろう。また、荒垣秀雄は、「天声人語」など毎日掲載のコラムでは、時事種ばかり連続の休みなしは不可能であるから、時に歳時記ものを挿むべく用意しておくがよい、と教えた。

いずれも長年かけて鍛えられた長持ちするための智慧である。しかし私の「巻末御免」は月刊誌であるから、両者の訓戒はいずれも応用できない。加えて種類を同じうするオピニオン雑誌『諸君！』巻頭のすでに評判を確立している匿名コラム「紳士と淑女」を意識せねばならぬ。当初の鮮やかな火消し啖呵みたいな切れ味は徳岡孝夫であつたらしいけれど、今は誰方が存じあげない。いずれにせよ「山本夏彦の写真コラム」(『週刊新潮』)と同様、固定読者に支えられているから、競つても叶わぬ先輩の華麗な行進であつた。

月刊誌コラムの泣きどころは、店頭に出るのが一カ月後という決まりである。輸送の日取りが固定されているから絶対に変えられない。これほど難儀な条件の制約をどのように解決するかにはとことん頭を悩ます。マラソンの長距離道路競走に弱い一周おくれどころか、四週間あとの踏み出しである。何かある事件が突発したとしよう。ただちに夜のテレビに映像をもつて報ぜられ、画面では必ずその道で専門家と謂われる人が現れ、したり顔に即席の解説を加える。事柄が大きければ新聞各紙が追い続ける。週刊誌がここぞとばかり掘りさげてゆく。知名の士が考へうるかぎり詳しく分析を重ねる。敵手誌の『諸君！』は翌月の二